

温羅伝説を推理する

松岡 正

◎温羅伝説

むかし、異国から温羅と呼ばれる鬼神が、空を飛んで吉備へやって来た。彼は百濟の王子であったともいう。彼は鬼ノ城を造り、そこに住んだ。温羅は力が強く、凶暴であった。時々、ふもとの村を襲い、食物を略奪する。村人は都にその暴状を訴えた。朝廷は吉備津彦命を討伐に向かわせた。命は吉備の中山（吉備津彦神社から北東の小山）に陣を構え、進んで片岡山に石の楯を立てて戦鬪に備えた（楯築遺跡）。いよいよ戦いが始まって、お互いに矢を射かける。しかし、その両方の矢が空中でぶつかり、温羅に当たらない。空中で衝突した矢は地上に落ちる。その場所が矢喰神社の附近だという。そこで命は一計を案じて、一度に二本の矢をつがえて発射した。この作は見事に成功した。一本の矢は前のように空中でぶつかったが、もう一方の矢は温羅の左の目に突き刺った。目から大量の血が流れて川になる。それが血吸川である。

さすがの温羅もたまらず鯉に変身して血吸川に姿をくまますが、命は鵜になってこれを捕らえた。鯉喰神社は、その場所であるという。命は温羅の首を切った。温羅は首だけになっても、いつまでも大声を発

し、唸り響いて鳴りやまない。命は吉備津彦神社の釜殿の〆へっつい〆の下に埋めさせたが、唸り声はやまなかった。ある夜、命は温羅の夢を見た。温羅は次のように告げる。「自分の事は釜殿で神饌（神への供物）を炊かせて欲しい。そうすれば、年中唸ることはやめる。もし世の中に何か起こったら〆へっつい〆の前に来て欲しい。幸なら裕かに鳴り、禍なら荒らかに鳴ろう」と。

（末尾記載の引用文献①。以後、文献〆と略記する）

これが吉備津彦神社の釜鳴神事の由来であり、現在も総社市阿曾（鬼ノ城南東のふもと）出身の女性が、この神事を行っているという。

備陽史探訪の会は、二月（平成六年）に鬼ノ城と楯築遺跡を中心として吉備路を回って来た。バス例会「古代吉備王国の謎を探る旅」である。私も参加して遺跡のミステリーを満喫して帰ってきた。家に帰ってから、車中で配布された「例会資料」（文献②）を丁寧に読み始めた。七森・平田両氏の著述は克明である。

しかし、読了後の私には何かひっかかるものがあった。やがて、それは楯築遺跡の〆木柵施設を伴う組み合わせ式木棺（文献② 22頁）〆という記事であったことに気がついた。以下これについて述べることにする。

◎ 楯築遺跡

(1) 一月の中頃、私は畏敬する八木敏乘先生（古代祭祀・積石塚の研究者。元会員）から、申敬澈教授（韓国の考古学者）の講演コピーを頂いた。それは、一九九〇年以降、釜山附近の古墳を申教授が発掘した結果をもとに発表したもので、その要旨は「伽耶の古墳は木槨墓である」ということである。

「木槨」とは棺を入れる空間（槨）が木材で作られたもので、発掘時点では腐食してほとんど原形はなく、痕跡からそれと判定される。注目すべき点は、楯築遺跡の木槨痕跡がわが国で初めて検出されたものだという点である。

申教授は釜山附近（朝鮮半島南部にあった古代の国「加耶」、『日本書紀』では任那日本府と称している）の古墳を木槨の特徴から年代別に区分している。その中で、楯築墳丘墓の木槨墓に対比される文を以下紹介する。

「Ⅰ類の木槨墓は床面に何も施していないⅠ類a型、床面に板石状の割石を敷いたⅠ類b型、床面に礫石を敷いたり等間隔に石を敷いて棺台にしたⅠ類c型にの三つに分けることができます。（中略）出土品から見ますとⅠ類a型は四世紀の前半、Ⅰ類b型は四世紀の後半、Ⅰ類c型は五世紀の前半だろうと推定されます。」（文献③6頁）

これを文献②28頁64図で見ると、楯築墳丘墓は教授のいうⅠ類a型に相当すると思う。また、教授は「考古学の資料の中で、他文化の影響の中にいても最も変わらず、その伝統を強く保つのは墓制です」と述べて

いる。だとすると、楯築墳丘墓は加耶族が吉備へ移住して造ったと考えられることも可能であり、その年代は四世紀前半以降になる。

(2) 次に地名をみる。文献①によると、

「吉備津神社は古代の行政区分では備中の国賀夜郡に所在する。この賀夜郡地域に本拠をもつ伝統的有力氏族に賀夜氏（香屋・蚊屋・賀陽とも書く）がいる。その「カヤ」の氏名から朝鮮南部の加耶地域からの渡来氏族ではなかったかという説もある」

とあり、さらに、次のような記述もある。

「寛平五年（八九三）の頃の賀陽郡の長官である大領の地位は賀陽豊仲であり、吉備津彦宮の神官は弟の豊恒であった」（文献①92頁）

(3) 以上から、足守川下流一帯は加耶からの渡来人が住んでいて、その氏族首長の一人の墓が楯築墳丘墓ではないかと、私は推測する。ここで、誤解のないように付記するが、この地域のすべてが、加耶人だとは考えていない。先住氏族がいて、その頂点に新技術をもった為政者としての加耶族がいたと考えるのである。後述の温羅も同様に理解してほしい。

◎ 鬼ノ城

私は、鬼ノ城の原形は神籠石系山城であり、のちに再構築したものと考えたい。その石垣は戒壇積み、重箱積み、布積み、牛蒡積み、神籠石状列石など様々な築城法をとる（文献①72頁）。多様な石積みがとられていることは、神籠石系山城を後年、再築・改築したものと考えるのが自然ではないかと思う。なぜなら、一部分ではあるが、神籠石状の列石

がはつきり残っているからである。

鬼ノ城について文献から判ったことを列記してみる。

1. 『和名抄』によると、古代の所在地名は備中国賀陽郡になる。

(文献④)

2. 「ウル」とは朝鮮語で包容式の山城の輪郭線を示すものであり、伝説の温羅はそれに由来するのではないか。

(文献①71頁)

3. 斯学の第一人者、向井教授によると、山城の出現時期は現段階では七世紀中葉とするしかない。

(文献⑤44頁)

などである。

◎温羅

天智天皇二年(六六三)、日本の援軍はむなしく白村江で大敗する。

百済最後の王城・扶蘇山城は新羅・唐の連合軍に攻められ落城し、百済はついに滅んだ。三千人の官人は白馬江へ身を投じたという。そのあとについて『日本書記』は次のように記録を残している。

天智天皇四年(六六五) 百済の百姓男女四百余人を近江の国神前郡に居住させた。

天智天皇五年(六六六) 百済の男女二千余人を東国に居住させた。

この人々は、百済滅亡から三年の間、政府の食を賜わっていた。

私はこれ以外にも多くの百済人がいて、その中には東国行きを拒んで西国へ集団移住した者もいるのではないかと考える。その中のある百済



鬼ノ城を望む

集団の指導者の一人が、吉備の温羅ではなかったと想像するのである。彼らは吉備に着いたが、沿岸部には先住の賀陽（加耶）族がいた。やむなく、彼らは足守川上流の阿曾附近に住居を持ち、背後の新山に鬼ノ城を造った。それは、新羅・唐との戦いに破れた苦い経験から、いざという時を想定して造ったのだと考える。

◎吉備津彦命

吉備津彦について郷土史家、村上正名先生は、「吉備国の初現の統治者であり、この人物を天皇の皇族とする伝承を作ったと見られる」

（文献⑥22頁）

と述べられている。私も同様にみる。冒頭の温羅伝説では省略したが、この伝説は第一〇代崇神天皇の御代の四道將軍の一人、山陽道は派遣された吉備津彦（七代孝靈天皇の皇子、彦五十狹芹彦命）のこととされる。他方、百済が滅亡したのは三八代天智天皇の頃であり、年代がまったく合わない。私は伝説上の吉備津彦を賀陽（加耶）族の武將と考えたい。

◎榎築遺跡

温羅伝説に登場する主要人物・事物について、だいたい私の推理を語ってきた。したがって、私の考えるストーリーを再現することは省略して、榎築遺跡についての感想を述べて小論の終わりとしたい。

榎築遺跡でまず一目を引くのは、巨大な立石が墳丘上にある榎築神社を取り囲んでいることである。まさに神秘そのものである。しかし、古

墳の上に神社を置くのは福山附近でもよく見られるので、いつの頃か、神社信仰で石祠が置かれたものであろう。

問題は巨大な立石である。氏子代表の楠強氏はもとは二七本あったという。私も神域を示す磐境と考えたい。それにしても、まさに古代の神の依り代を思わせる磐境だと思う。

石祠の御神体には、もとの榎築神社の鳥居にあったと思われる、「榎衝神社」と記された石額があった。その書体は篆書体に近く、あるご婦人（お名前を存せず失礼）の判読である。おそらく以前は榎衝神社と記していたのであろう。

御神体の亀石（重要文化財）を収蔵庫で間近に拝観させて頂いた。以前ならば、国宝ともいわれるものである。「国宝」を今まで手に触れたこともなく、今後もないであろう。

例会を計画された七森・平田両氏に厚く謝意を表してこの推論を終わる。また、多くの文献を引用させていただいたが、末尾に記して謝意に代えたい。

△引用文献▽

- ① 『図説 岡山県の歴史』近藤義郎編（河出書房新社）
- ② 例会資料「古代吉備王国の謎を探る旅」七森義人・平田恵彦編著
- ③ 『巨大古墳と加耶文化』西嶋定生他共著（角川選書）
- ④ 『日本城郭大系 十三』（新人物往来社）
- ⑤ 『古代学研究 第一二五号』向井一雄著
- ⑥ 『備後の社寺』村上正名著